

言語學的宗教學目次

緒論	一
第一章 言語學的宗教學の立脚地	五
第二章 神話の成立及性質	九
第三章 言語と宗教的觀念	一七
第四章 神人の關係と言語の神格化	二九
第五章 宗教哲學に於ける言語の神格化	三七
第六章 文字の崇拜	四一
第七章 民間崇拜に於ける言語崇拜	四七



言語學的宗教學目次終

言語學的宗教學

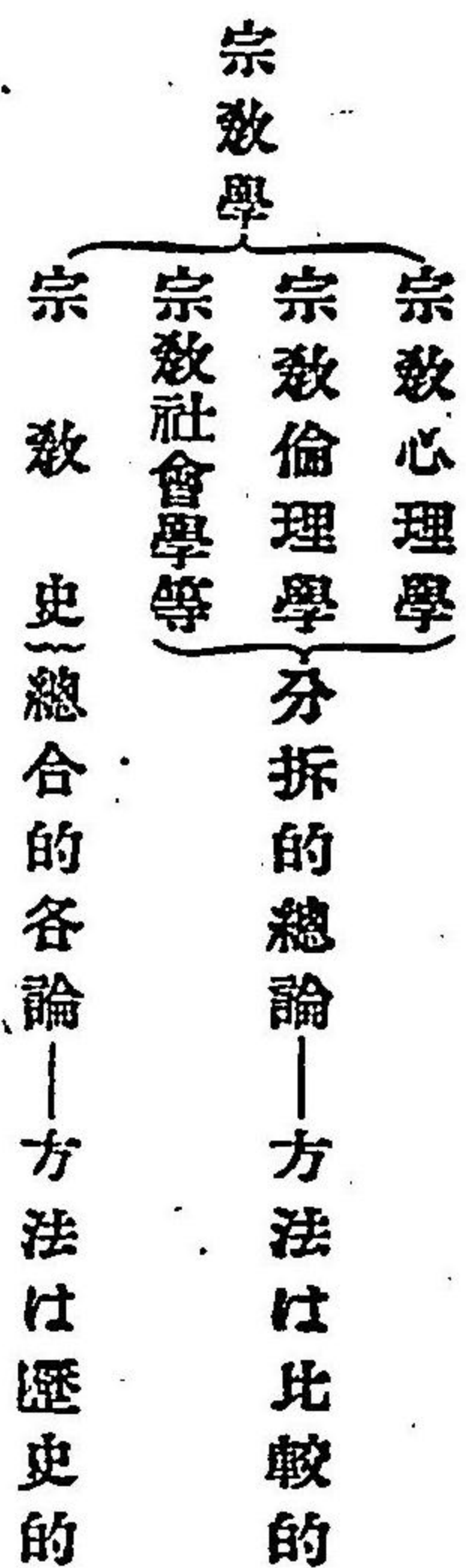
文學士 姊崎正治講義



緒 論

宗教は極めて複雑の現象にして、其因て成立するの原因及其が及ぼす所の影響は頗る多方面に及ぶ。心理的には宗教の成立は人間が自己より優勝なる其の勢力あるを畏怖又崇拜するに起り、其結果は人の心情に満足を與へ、或は之を迷信に導く事あり、社會的には其成立の原因は人間の社會的生活の關係よりして共同信仰を生じ、其結果は或は其信仰に依りて社會を結合し、或は社會の道徳より美術文學を左右し、其勢力の及ぶ所殆ど端睨すべからざる者あり、又哲學の方面より見れば、哲學的考察の起原と宗教的觀念の發達とは密接に相助け、此より以後哲學考察の結

果と宗教宗義の確立は密に相交渉す、此の如き多端なる現象なるが故に其を研究する宗教學の方面亦多端にして、其中に宗教に於ける心理現象を研究する宗教心理學、其の實行的發現なる宗教倫理學、宗教を社會的現象として研究する宗教社會學等を分ち、此等を總稱して宗教學概論と稱すべく、又此等概論の分拆的に研究したる事實を、人間歴史の上に具象的に現はれたる歴史的發展として見れば、宗教史をなすべし、終に哲學の方面よりして宗教現象の哲學的意義を解釋し、加之宗教を成せる諸の觀念信仰を哲學的に批評考察すれば、宗教哲學をなすべし、宗教の研究には此の如き諸の部門あると共に、其研究の方法亦多趣ならざるべからず、其哲學的研究は暫く之を措きて、其他に於て之が方法を大別すれば、比較的と歴史的となるべし、比較的とは即諸の宗教現象を彙類蒐集して之を分拆比較し、其比較に依りて得たる結果を因果の關係に照らし考ふるなり、歴史的とは比較研究が到着したる宗教現象の因果的關係の光明に依り、之を一貫の發達をなせし宗教の發達に應用し、宗教の歴史的發展を總合考察するなり、即前者は分拆的概論にして後者は總合的各論なるが故に其關係左の如くなるべし、



此中比較的研究に就きて、又其方法に差別の存するあり、即此方法を宗教現象の外面的發表に應用すると、其内面的活動に應用するとに依りて其結果に自ら差別ある事、恰も生物の比較研究に形態學(解剖と組織と)生理學との別あるが如く、宗教の外面形態と内面生理との研究となるべし、此二面は固より密接不離にして生理を離れて形態なく、組織なくして活動ある能はざるも、只研究の方便の爲に此二を分つのみ、

而して此二面の研究は近世の宗教研究に二大學派をなすに至りし原因にして、此研究方法の差別は終に其斷案の懸隔となり、二者は學派として敵視するの觀あるに至れり、此二學派とは言語學派と社會學派とにして、言語學派は宗教特に神話思想の發表なる言語に依りて宗教と神話とを研究し、其結果は神話及宗教の成立は

言語之が原因をなすと断するに至りぬ、而してマクスミラー、クーン、キルンペル等之が代表なり、社會學派は専ら今日亞弗利加其他に存住する未開野蠻人を比較的社會的に研究するに起り、彼等の心理的、社會的狀態に基きて其信仰を説明し、此例證を以て人類の宗教と神話とは其起原を靈魂の信仰に發すと断するに至れり、而して之が代表者はラボック、タイロル、スペンサー、チール等にあり、此二派の如きは固より學派として争ふべき性質の者にあらず、今日にありては其争端を如何ともするなし、只吾人の如く學派に屬せずして、其争端に加はらざる者は公平に二者の所説を知悉して其の取るべきを捨つべきを捨つべし、我邦には宗教の研究尙幼稚にして特に神話の研究甚だ起らざるが故に、此二派の争論の如き亦甚だ世に知られず、然れども一方の社會學派たるスペンサーの所説は時々世に紹介せられしあり、社會學派が靈魂の觀念を以て宗教を説くの説も稍世に知られしを以て、此講述は特に言語學派の所説及研究法を叙述するを目的とす、言語學派の研究法は餘りに言語に偏して宗教を見るの弊なきにあらざるも、其断案に至りては余は社會學派の靈魂説の到底維持すべからざるを見るが故に、言語學

派が言語を方法として到着したる決論、即宗教は幼稚なる人民の天然觀に發すとする説に左袒す、此を以て此講述は單に言語の方面よりして此宗教起原説を見たる者といふも可なり、

第一章 言語學的宗教學の立脚地

言語は只思想の器具にして、精神の影像なるのみにあらず、言語と精神、言詞と觀念とは恰も人の心と肉體との如く相分つべからずして一團の機制を作れるに似たり、此を以て思想なければ言語なきと同時に、言語を離れて思想を運動する能はず、思想が新なる言語を生むと共に、言語は又新に思想を刺激する事あり、思考は無聲の言語にして、言説は有聲の思考なり、

言語の成立に就きて古の學者は、其が無意識自發的に音聲を以て思考を表するに至りしか、將た意識的約束的に言語を作りしかを問題としたり、然れども言語は思想が先づ心中に成立して後に音聲が之が代表の器具となりしにあらず、心か事物に接して其印像感覺を得れば、此印像は心に知覺となり、言語に音聲として發するのみ、兒童に於ける感覺の發育と言語の發達とが先後なく相伴ふを見れば、此事實

は明白にして、言語と思想とに先後の關係を見んとするは言語の心理を知らざる者なり、

(六)

且今世にては表象的言語、抽象的思想の發生すると共に、言語と思想と相伴はずして、表象的言語は單に思想の器具たるに過ぎざる傾向ありと雖も、言語元來の性質は此の如く表象的なるにあらず、特に古代に溯るに従ひ言語は思想と共に其生命を有し、現實に見る所の状態又は動作に相對する言語と其印象を受くる思想と同一なりしなり、此故に希臘語の「ロゴス」といふは言語の義にして、又同時に理性即思想の意義あり、希伯來語の「ハツラト、ナラ」は説すの義にて、又考ふる事なり、創世紀八の二一に「神は考へぬ、彼の心に語りぬ」といへるは即此にして「語る」と考へるとの不離に行はれし證據なりといふべし、此を以て近世の言語にして全く人工的表象的なる者多きが如きも、特に日本にて支那字を合はせて新語を作る如き、其源を探れば一として具象的に十分の意義を有し、事實に基かざるなく、又今の用法は之を表象的に用ふるも、其は全く表象的なる事、鵲の言語の如きにあらずして、幾分かにも思想と密接不離の關聯ありて始めて言語の用をなすべし、又此の如き表象的

言語を以て表すべきが如き抽象的觀念は其れ自らにては一種の空虚にして、即一般に抽象的觀念は事物に具象的に該當せざるを以て言語即其名なしには思想の中にて用ひられざる者なり、此故に事物は考へたり、考へは言語となるといへるは、言語と思想が協同して外界事物の主觀的對境を作る關係を表し得たる警語なりといふべし、

此の如く言語が特に原始の時代に、思想と一なりしとすれば、一般に人間の特に原始人間の精神界に起りし現象を研究するには、其言語に依るは最便益の方法にして、又最も正當の方法なりといはざるべからず、加之人類の宗教的意識が開發し始めし時代の事業に就きては、吾人は言語を措きて他之を研究すべきの材料方法なきを如何にせん、彼の社會學者が今日の野蠻人を以て研究の材料となし、其結果を將來に直に一般人類の原始状態を臆測せんとするが如きは、愚見の甚しき者なり、何となれば今日の野蠻人は開化にこそ進まざれば、彼等の進まざりしは沈滞せし爲にして、彼等は吾人の如き文明を有せざるも、其觀念界は未開の儘ながらに古來幾何かの變遷を經來りしなり、此故に彼等の状態を以て原始の人類に及ぼさんと

(七)

亦或は成人の白痴を見て其無知なるが故に、直に之と小兒を同一視せんとするに
 同じ、其斷案を正鵠を得ざるは數の當然のみ、亞弗利加なるザル人の神なるウンク
 ルンクルは大祖父の義にして、現に彼等は自己種族の祖先として之を拜するを以
 て、多くの社會學者は此種族を以て始より祖先崇拜の人民なりしが如く思ひ、此を
 以て人類の宗教が原始には靈魂崇拜に發せし一例證となしたり、然れども能く其
 種族に親炙して其觀念を探求し、彼等のウンクルンクルに對する歌を吟味すれば、
 豈計らんや、彼等の大祖父とは即太陽にして、彼等は自己の種族が太陽より出でし
 と信ぜしより、之を大祖父と稱せしなり、されば社會學者の探求も固より有益なる
 も一層深く人民の觀念を探るには其言語に入りて、信仰の奥を叩くの要あるや此
 の如し、

言語に依りて宗教を研究して第一に起るべき問題は、宗教の起原は幾何言語の發
 達に助けられしや、即神話は如何にして言語に依りて起りしかにあり、此に次ぎて
 は宗教の觀念は何程言語と關係して完成せしか、即宗教の教義信仰が心理的に發
 生するに當りて言語は如何に之を助け、又吾人は言語に依りて何程迄に其成立を

説明し得べきやの探求を試みざるべからず、特に此甲問題は言語學的宗教研究の
 特に成功したる點なりとす、

第二章 神話の成立及性質

神話の内容は原始人類の天然及人生觀にして、即宗教が發生する胎處なり。而し
 て此神話は原始人類の言語が常に形容的メタフォル的なるよりして、其構想と合し
 て不識に産出せられし天然人生に關する說話なり。凡そ人間の觀念思想は決して
 言語と離るべからず、否言語と思想とは思想構想なる一活動の兩面なり、特に原始
 の言語は其發生の初期にありて極めて具象事實的なる思想の一面なるが故に、見
 聞するが儘の事物の動作現象の外に出でず、今日の言語にて、樂器といへば此詞は
 恰も樂器其物の表象記號なるが如き觀あるも、之をなり物といへば即彼の物が鳴
 るといふ印象が直に言語に發せる者なり、又希臘語にてヒッポス(Hippos)即馬とい
 ふも、彼が早く走てあるといふ印象を直に音聲に發したる者なり、即言を換えてい
 へば、此の如き言語は記號の死物にあらざして活動の印象なり、觀念の代表にあ
 らずして印象の發表なり、言語は皆此の如き活動の根本に出でし者にして、其根本は

一のことばにあらざ、一の命題なり。言語學上此根本言語を稱して命題言語(Sentence-word)といひ、又根詞(roots)を梵語にて Dhātu) といふ。

(110)

此の如き命題言詞に依りて思想する人々にとりては、思想が外界を見るに皆活動の状態にあらざるべからず、火を見てあれは火なりと思へば、其は同時に燃えてあるといふ思想なり。此の如き思想言語の状態にある人類が、天然を觀すれば天然は皆活動し、思想言語は此活動を説話的に形容的に見るに至らん。此説話的形容的觀察は即思想言語に神話として發表し、思想は外物を活動せりと信じ、言語は此活動を説話す。神話即ミソロジー(Mythology)の原語ミトス(Mythos)はミョス(myo)即話すの義にして、原始の思想言語が活動せる外物に就きて話すを稱して神話といふ。さればマックスミューラーも云ひし如く、神話は物(Mund)に非ずして過程(Quale)なり。言語自然の性質より出でたる不識的産出なり。人間思想發達の中に自然に必然に經過すべき一階段なり。古より神話の研究が其正鵠を得ざりしは、此根本性質に氣附かざりし爲にして、或は之を解して譬喩に依りて宗教觀念を飾りし者なりといひ、或は宗教の範圍に於ける詩的構想の産物なりといひしは、皆神話を以て、故意の製作、省慮

の産物となす者なり。若し神話が此の如く、故意省慮に成る者となれば、今日にても多く神話を作り得べき者となり、又は一二僧侶が之を製作したるを他の衆愚民が之を信ぜしとなさざるべからず、其れ皆非なり。

此に於て言語より説明し得たる神話の性質を列舉すれば左の如し。

- 一、原始時代に出でし事。
 - 二、構成的省慮に關係せずして、不識的に産出し信憑せられし事。
 - 三、天然人生の事實經過を、歴史若くは之に似たる形にて表する事。
 - 四、神話は天然人生の事實を活動的に見て事物を活物とするが故に、宗教的性質を有して人の構想思考を刺激する事。
 - 五、事實以上の實在を信實なりと純朴に無批評に信憑する事。
 - 六、説話の起原及實相如何を問はざるが故に極めて不定なる事。
- 是れなり。

今言語上の研究に依りて神話の成立と意義とを説明し得たる實例を擧げん。希臘のケフプロスと其妻プロクリスの神話は、優美なる神話として人の喜びし處なるも、

(111)

其希臘が如何にして成立したるかは、少しも明ならざりき。然るに印度歐羅巴語の比較研究に依りて其神話中の神名を解釋して、其の何事たるかを知るを得たり。其神話とは男神ケファロス (Kephalos) は女神ヘルゼ (Hersa) の子なりき。女神プロクリス (Prokris) を慕ひ愛して夫婦となりぬ。ケファロス一日鹿を狩して野に出でしか。薔薇色したる少女エオス (Eos) 此偉丈夫を見て心動き、之を己の宮殿に誘ひしも、ケファロスは其妻を思ひてエオスに愛情なし。エオスは嫉妬の情を以てプロクリスを愛へつゝ家に歸り見守らざるを咒咀して、ケファロスを放逐しぬ。ケファロスは此事を憂へつゝ家に歸り見るに、妻に失徳あるに似ず而も尙疑心を抱き、自ら容貌を變じて他人となり、種々の方便を設けてプロクリスを誘ひしに、其心終に動きしを見て、其貞操なきを怒りぬ。プロクリス其實を知り、他方に遁れ、其後再び其縁を回復せしも、復偶事の爲にケファロスに殺されぬ。

此神話は此く語り來れば甚だ趣味ある事なるも、其神話としての性質意義に就きて知る所あらずんば、一片の說話昔語に過ぎざるが如し。然れども言語を以て之を解釋せば、事理自ら明なるを見ん即ちケファロスの意義は大陽にして、エオスは曙光

の義而してプロクリスは梵語の Prush 英語の Spanish と同じき語源にて撒くの義、即野邊に撒亂せる露なり。さればケファロスがプロクリスを愛して之を婦とせしは、太陽が朝露を喜ぶ風あるなり。エオスかケファロスを誘ひしは、太陽が曙光に誘はれて曙光の居住なりし東天に出でしなり。ケファロス装を變じて、プロクリスを誘ひ、爲に夫婦背反せしは、霞が太陽の面を蔽ひ露に太陽の美しき光映せざるなり。プロクリスが終にケファロスに殺さるゝは日光の爲に露の散り失せしなり。

觀念と言語とは思想なる同一機能の兩面として、相共に神話を作り、觀念は言語の性質に依りて活動して神話を産出す。而して言語が神話を作るは前述の如く、言語の根本性質より出づる外に、又言語の發達に於ける事情に支配せらるゝ事多し。特に同義多語 (Polynymy) 及同義異語 (Homonymy) は神話に影響多し。例せば、同じく夜をいふにも、黒しといひ、暗しといひ、汚れたりといひ、同じく鳥をいふに、羽あるもの、飛ぶ者、空中にある者といふは前者にして、夜は黒く、牛は黒きを以て、夜を表するに牛なる語を以てし、牛は乳を出だし、雲は雨を注ぐを以て、雲を雨といふは後者なり。此の如き關係あるよりして、神話に夜を黒面とし、或は又惡鬼とする事あり。或は夜が

牛を呑ひしといひ、或は雲を宿せる大空と夜とを一とし、終に夜にして又大空に又水雲なる神婆樓那(Varuna)を生ずるが如き結果を生ぜり。或は又河を流水の故を以て飛ぶ者といひ、雲も亦飛ぶ者と稱せらるれば、此言語の關係よりして河水と雲と結婚する等の神話に導火を與へ、終に弘く神話の中に二現象の結婚をいふに至る事あり。

(一四)

此外名詞の男女性に依りて神話の成立性質を説明せんとする言語學派あり。シラデル(Schädel)の著作「言語比較と原始歴史」の如きは是れなり。例せば、日と月に關する神話の如きは、其根本は日月の天然現象及之が表明の活動的言語にあるべきも、諸國の日月神話は此二者の男女兩性の關係にて説明し得る者あり。希臘にて、日は馬にて驅ける男、即ヒポリト(Hippolytos)と稱せられ、月は輝ける面、即フエドラ Phaedra といふが故に、ヒポリトは其繼母フエドラに遣はるるといふ神話あり。東北印度なるカシア地方にても此と同様の神話ありて、日を男とし月を母とせり。之に反して、日を女性にし月を男性にする國にては、又之に相當したる神話あり。米洲土人の中には、兄なる日が、妹なる月を姦せりといひ、エスキモウの神話にては、兄なる月が妹

なる日に懸想したるが故に妹の爲に煤を面に塗られたり、此を以て月は時々其面を黒くすといへり。エツダの神話にては月が兄、日は妹にして、共にムンデルフォエル(Mundelorf)即旋盤者なる人の子なりといふ。古事記にては、天照太神は女神にましまして、月讀命は其弟君なりと傳ふ。

兎に角言語に於ける男女兩性は、神話の性質に關係あるは明なれども、兩性の存在を以て其成立を説明するは過當なり。性なき言語にても神話あり、又最も神話的構想に富みし印度ゲルマンの原始の言語には、男女兩性の特性なかりしなり。されば此事は過重視すべからざるなり。

言語は神話の成立に欠くべからざる原因にして、又其性質變化に關係多き者なり。然れども言語學派と雖も、言語を單に音聲として神話を説明せんとするにあらず、言語を思想として其發表の方法に依りて神話を説明せんとするなり。故に神話の基本材料となるは人心思想を刺激して活動せしむる外界にあらざるべからず、而して外界現象の如何なる者が特に神話の原因となるやに至りては、所説甚だ區々たり。今其主なる者を擧ぐれば、マクスミラー及エツクスは天體現象を其基本とな

(一五)

（一六）
 シクローン、シツルツ（Schwarz）、ダルメステテル（Darmesteter）等は空中の氣象を主とし、
 キルヘンマウエル（Kirchenbauer）は宇宙發生説及天文説の説を取れり、然れども此等
 の別は一概に何れの國にも同一の説明を施さんとする者にして、其國の風土事情
 にて神話の刺激原因亦各異なるを忘るべからず、例せば、セム民族の如き、支那人の
 如きは宇宙的觀想に、原始アフリヤ人は天体の觀想に、波斯人及吠隨中葉の印度人
 は空中現象に、ゲルマンの如きは歲時轉換の現象に其神話を發生したるの跡明瞭
 なり、故に其一を以て直に他に及ばさんとするは非なり。

以上原始の宗教に關係多き神話に就きて言語學の説明を施しぬ、此外に直接に神
 話ならずして宗教の原始に關する事實に就きて、言語學の説明を施し得べき者、
 又は之を試みし人あり、例せばブレック（Bleek）は其著言語の起原に於て、前置代名
 詞ある國語は祖先崇拜を起すに都合好しといひしが如き、フロインメルが其著
 「科學として神話學に於てオメルの説話を説明するに、其説話中なる地方の氣象に
 關する言語關係を以てせんとしたるが如き、是れなり、然れども、此等は尙確定せる
 學説といひ難し、只極めて明瞭なるは、埃及の宗教には言語文字の關係多し、彼國の

古代にては神像を彫刻するも、其幼稚なる彫刻は十分に其區別をなす能はざるよ
 り、言語文字を以て神像に附加したり、此が爲に言語文字の類似より神を錯雜し、或
 は言語文字を神とするの結果を生じたり、例せば、ニル河の妻なる女神オケアメ
 （Okeme）を表するには、楯がオカム（Okham）と稱するより、音の類似の爲にオケアメを
 楯にて表し、楯が一種の神となりしが如きあり、或は神名の頭字を以て彫刻に附着
 したるより、其文字が神の如く見做さるゝの奇觀をも生じたり、印度にて庵（^アウ）の
 一音を以て絶對の神なりとせしも亦此實例なり、南洋に有名なるタム（Tabu）崇拜も
 亦一種の言語崇拜にして、言語は神靈の力ありとして之を呪咀に用ひ、又之を祈禱
 に用ふ、一般に呪咀に關して、并に印度に發達したる言語的宗教は、後に之を叙述す
 るの時あらん。

第三章 言語と宗教的觀念

宗教は其原始なる神話成立の時に言語に關聯するのみにあらず、其が高等に發達
 したる後迄も、宗教的意識の内容として有する緊要なる宗教的觀念は、言語と離す
 べからざる關聯を有せり、即神、無限、精神、不死の如き概念の成立、亦言語に於て之を

見ると得べし、

始に神なる觀念に就きて見るに、若し言語が神に就きて人の腦中に明なる印象を與へざりせば、人間の之に對する歸依信賴の情、及畏敬讚嘆の情より、及神に關して種々の考察を廻らす事は甚だ空漠ならざるを得ず、神といふ事は今日にては高尚にして時には非常に抽象的なる概念なるも、此は其始より天賦なりし理性所生の觀念にあらざり、其觀念が宗教的意識の中心として實力を呈するに至るは、極めて具象的なる印象に得來て、言語が之を人間精神の中に活潑明瞭に活動せしめしに因らずんばならず、

インドゲルマンの言語は一般に神を稱してデーワ(Dewa)と呼ぶ、即ち輝くの義にして、日月天空の如く、其光明晃耀に依りて人に恵を下だす者は皆神格なり、彼等は固より日月等一々の現象を見て、具象的に其光耀の印象を得しのみ、日と月とは其光輝固より一ならず、日と火とは其温熱一様ならざるも、若し其等が何如なる點にて吾人を恵み、又吾人に對して勢力を有するかを思へば、其光輝あるといふ特質は、特にインドゲルマンの心を刺激せし者にして、特に之を彼等が稱してアストラ(Astra)

とせし、人の思むべく又怖るべき冥暗に比し來れば、日月天空の光明は其の光明現象たる所以を以て、神即デーワたるを見るを得ん、即光明なる言語は一々の現象を包括してデーワなる現象を神格とし、此神に對して宗教的關係を結ばしむるに至れり、今日印度ゲルマン族の諸言語にて、神に關する言語は皆此痕跡を傳へたり、希臘語のテオス(Theos)、ラト語のデーウス(Dewa)の如き、又羅甸のデウス(Deus)、デヴィヌス(Divinus)即英語の divine)の如き、皆此と同源なり、

インド以上印度ゲルマンに就きて神なる觀念の成立を説きしも、此關係は其他の民族にも十分に明なり、即埃及人の神格ヌタル(Nut)は強きの義に出で、ヤム民族亦一般に強力の義なるエル(Eil)を神格とし、フアン人は活ける靈なるハルチア(Haltia)を用ひ、チゴイテルも光なるデル(Del)若くはデツラ(Devla)を神とせり、此の如き關係は又亞弗利加の蠻人の間にも發見するを得べし、左に之を列舉せん、

黄金海岸の土人	ヤンコンポン Yankompon	光明ある高處の義
ヤンシエ	Yammie	造る人の義
エニ語の種族	マウ Mawu	一切に勝れたるの義

加利弗亞西

下流ニル土人チユク若くはケ Ouku, Oi 天空の義
 ガブル及オゴエ人アニヤン ヲヨ Aniyambie
 バフオテ人 スサンビ Nsambi
 カルンダ人 ンザビ Zambi
 ナルツェ人 ニヤンビ Nyampi
 造る人の義

(110)

加利弗亞南

ホツテントッチン人 ツイゴアム、又チユイコマン Tsui-Goam, Cui-Koab
 諸の物の人即主人の義
 首、大將の義
 Kaan, Kue-Akenkung
 コサ人 ウムシロク Umshologn
 最大祖先の義
 ザル人 ウムクルンクル Unkulunkulu
 最大酋長の義
 ペチユイ人 モリモ Morimo
 只名稱なるが如く、
 意義不明
 バスト人 アベアテ Hubeano

ア 族

マレバ人 トヤト Toyato 天地創造者なりと雖も、
 語原は不明、
 ヘレロ人 モクル若くはオワクル Mokuu, Ovakuru 太古の人の義、クル
 は古きなり、
 マタベル人 エンゴシバスル Enkosi Pasul 高處の王

此外中央及東亞弗利加に就きては繁雜を避けて此に記せず、兎に角亞弗利加の如く、總ての事不明に屬し、特に言語學上の探檢尙周ぬからざる處にありても、少しづつ之を探求すれば、彼等土人の神に關する意識は、具象的の印象に因りて發し言語に助けらるゝを見るべし。

次に宗教的意識に關係最も深き無限といふ觀念の如きも、其源は有形なる者の漠然と弘大なるか、若くは眼前に何とも把住し難き者を見て得し觀念なり、而して其跡は言語に明なり、吠隨にて諸の光明神の母と稱せられし阿緞提(Aditi)は、始は曙光が天空に紅黃の色を漲らして洋々たるを何か限なき者の如くに觀取したるに發し、其より進で天空が蒼々たる大洋の如く、無限の光明其中に充滿せるを見て、之を

(111)

阿緞提即無局限と稱したり、されば此始に當りて無限といふも、絶對の無限を見しにあらざ、特に其言語に見れば、其表明たるアアテはテテ即局限なきの義なれば、吠隨の人民が積極的に無限絶對を把住せしにあらざして、消極的に限なき茫漠を見しは明なり、されば無限といふ觀念は、やはり知覺にて有形の事物を把住せしに出でしなり、其より以後宗教的意識并に哲學的考察が進歩するも、人間の言語が積極的に無限といふ觀念を表し得ず、或は限なしといひ、或は窮なし、量なしといひ、或は終なしといひ、梵語の Ananta 英語の infinite 獨逸語の unendlich の如き、單に消極的に之を表明するを得るのみ、若くは又之を積極的に表明する場合にも、眞に無限の謂にあらざして、比較的に大なる有形の詞を用ひし者なり、英語にて今日永久即時間の無限に用ふるなるイターナル (eternal) は、其根羅甸語の エテルヌス (Aeternus) にして、エテルヌスとは元時間の義にて、頻にといふ義より常にといふ義に用ひられしなり、同じく獨逸語にて永久なる エーウヒヒ (ewig) も、亦羅甸語の エーヴム (Aevum) にして、エーヴムは元時間の長き義にして、老年壽等の義に用ひしなり、パーリ語にて無始無終の義に用ふるデーガ (Dīga) 即長久なる語も、亦元は只空間的に物の長きの義なりしなり、

無限永久なる觀念は宗教上甚だ重要なる觀念にして、宗教的客體は此觀念に依りて成立せりといふも不可なく、此觀念は宗教的意識の中心核實なりといふも敢て過言にはあらざるなり、而して此觀念は此の如く言語の證明に依れば、始は有形物象の把住知覺より出でしなり、而も此有形物象が宗教的意識の大なる部分を成せるの跡は昭々として明なり、支那の宗教の如きは一言にして蔽へば天の崇拜にして、之を人事に應用して天命を敬すといひ、天道に従ふといふも、意識の根底を叩けば、若々たる無限茫漠の天を崇拜せしなり、昊天に泣くといふも、大空を仰で心情を訴へしなり、此故に其天なる語(蒙古語の テンクリ Tengri 匈加利語の テンクリ Tengli 土耳其の テンギリ Tengli 皆同源なり)は最も明に蒼空の茫漠が神となりしを示せり、即其字を解剖するも、天は一と大とにして、大なる者が茫漠洋々として其中に差別區別の認むべきなくして、大空に横はれるを指せり、是れ恰も印度の阿緞提に同じ、我國の佛教にて最も大切なる阿彌陀佛の如きも阿彌陀即アミタ (Amīta) はミタ即量なきの義にして、元は多くは無量光アミタバ (Amita-bha) 若くはアミタラバ

(Amita-prabha) を以て稱せし者なれば、其が宗教的客體として重要な位置を占め、他カ本願の本主となる前程としては無限の光なる大空として人心に把住せられし時ありしなり、マクスメニエラの言を用ふれば、有形にして而も廣大茫漠なる者のみ神的資格(theogonic capacity)を有して、人類が之に對する畏敬歸服の感情を刺激し依て宗教的意識を生ましめしなり、

然れども、人間の進歩は宗教的意識を高度にし、宗教的意識の進歩は又神即宗教的客體に關する觀念の進歩と相離るべからず、無限の廣大を崇拜せし人心も尙綿密に且明晰に考察するに至れば、一層積極的に宗教的客體を把住せんとす、而して此傾向は明に言語に發表せり、先に掲げし永久の如きは稍此方向に進みし者なるも、此より一步を進むれば茫漠の無限を棄て、一々遍く一々に適用すべき無限を把住す、佛教及印度宗教に於ける一切智即薩婆若(Sarva-jñā)一切救者(Sarva-sattu-tīkṣa)の如き、基督教に於ける一切知(Omni-science, Allwissenheit)一切慧(Omni Allweisheit)遍在(Omnipresence, Allgegenwart)一切能(Omnipotence, Allmacht)の如きは、皆一切即万象万物に通じて其知能を活動し、又吾人が其發表を認むべき者の義なり、即ち梵語のサルワ

(Sarva) 希臘語のオトニ(Omni) 獨逸語のアル(All)は皆、何れも、各々等の義にして、一切に遍達せるの觀念を表せり、而して此一切の觀念は又他方にて表明すれば普通の觀念となるべし、即佛教が佛を形容するに、無量光なる消極的言語より一轉して普光即サマンタブラハ(Samanta-prabha)といひ、無限の智を人格化して普賢即サマンタパトラ(Samanta-bhadra)なる菩薩を想像せしが如きは、其宗教的意識の明晰確實に起きしを見るべし、サマンタとは元は複合の義にして、事物が能く相複合團結するの義より完全の意義を有し、從て又總ての方面にての義、周到の義に用ひらるゝに至りしなり、

今無限普遍の觀念が、佛教の中に如何に發達せしかを明にせん爲に、無量壽經なる一嘆佛偈に就きて、此觀念の消極的表明と積極的言説とを列舉對照せん、此偈は宗教的客體を嚙嘆せし者にして、多く此觀念を表する言語を含有すればなり、(表中の漢譯語は康僧鏡の譯語にして、其は多く義譯なるを以て別に和譯を以て直譯を對照す、)

第一、消極的表明

Amita-prabha

光顏巍巍

無量之光

Ananta-tulya.	無極	併ぶ者なし
Ananta-sattvasāra	超世無倫	無限にして衆生の最上なる
Ananta-ghosha	大音響十方	無限の音響
Ananta-tejas	光照悉照	無限の光輝
Ananta-kshepra		無限の地方を救ふ人
Asanga-jñāni	智慧無礙	執着なき智慧の人

第二 積極的の表明

Sarva-sattva-trāṭā	度脱一切	一切衆生の救者
Samāna-lokadhātum		總ての世界を照す人
Agra-greṣhita	國土第一	第一最上
Sarvata-prahla		何れの處にも光明

佛教の如く思想想像共に進歩したる宗教にありても、其の無限者に對する考察は、直に積極的實相を憧憬しながらも其思想は直觀に伴はずして、言語の反面消極的表明に支配せらるゝを見るべし。

第三宗教發達の某時代に當りて重要なりし靈魂の概念を見るに、言語上の研究は頗る其意義を明瞭にする者あり、何れの國民にても人間の生死に就きて最も注意に上り易き事實は生命去りて死するに當りては、先其人の呼吸去り而して後に体温消えて生氣全く去るにあり、されば日本語にても死の事をシ(志那戸)などのシにて風の事なりイヌとて、風即呼吸が去ると稱せり、此を以て此の如く人間生命の司管たる呼吸は生命に貴重なる實跡となり來り、終には身軀と別なる靈となり、所謂靈魂となるに至る、固より此く靈魂と固成する。迄には、痲瘋等の現象が其成立を助くるはタイロル等が論ぜし如し、近くはメベンサー社會學の初を見よ、此の如く呼吸の觀察と生死の現象とを濫觸として起りし靈魂の概念なれば、靈魂といふ語は多くの國にて呼吸に關係せるは又自然の數なり、即諸國語中にて呼吸を靈魂とさせる二三の例を舉ぐれば、梵語のアートマン (Ātman) 及 アヌ (Ānu) 希臘語のプシハ (ψυχή) 羅甸語のメモリス (Spiritus) 希伯來のキネマシ (Nephesh) は何れも呼吸にして、特に梵のアートマンの如きは尙今の獨逸語の中に呼吸といふ意義にて殘存せり、則獨逸語の呼吸する動詞アトメン (atmen) 及呼吸なる名詞アトテム

(Athen) は彼の *アトマン* と同源の語なり、

此より一步を進むれば口を出入する呼吸の外に、何が温熱を有する氣様の靈ありとし、此者則靈魂となり來るを常とす、希伯來語の *ルアハ* (Ruach)、亞刺比亞より歐洲語に轉じたる *ガイスト* (Geist) 即英語の *ゴースト* (Ghost) の如きは、呼吸の氣の充滿したるに發し、希臘語の *プノイマ* (Pneuma) は殆ど精氣と稱すべく、羅句語の *アニマ* (Anima) は生氣と稱すべし、精氣といひ生氣といふは元は呼吸なるや論なし、此種の觀念は今日野蠻人の間にも見る所なり、亞弗利加の黑人は多く影を以て靈魂とさせる事我國の幽靈に似たるを以て、呼吸の方面十分に明ならずと雖も、亞米利加土人に至れば明に此觀念を有せり、一西班牙人の記録に據れば、土人に靈魂の事を問ひしに、左の如く答へしといへり、曰く

人死せば何か其口より出づる者あり、其人に同じき者にて之を *ユリオ* (Julio) といふ、此は其人に同じきも、其は死せず、身軀のみ此に止まる、
 と、*ユリオ* とは即生きたるといふ事にて、其は口より出づる者なりといへば呼吸精氣に似たるを見るべし、

兎に角靈魂の觀念は、多くの國民にて此の如くにして成立したり、而して此の如く身軀を離れて別に生氣の如き靈魂ありとの信仰成立すれば、此より靈魂不滅の信仰となり、未來世理想界の構成となり、宗教の中に豐富なる活動の材料となるを常とす、又不死未來世の信仰の外に重要な觀念の此靈魂なる概念より出でし者あり、即印度の *アトマン* は呼吸より靈魂となりしが、靈魂は即我の人格となり、此自己は又哲學思想の發達と共に、宇宙的大自己即最高自己 (Paramatman) となり、印度哲學考察の中心點となす、又希臘の *プノイマ* は後に基督教に入りて神の子なる基督の本質なりと信ぜられ、所謂 *プノイマ* 的基督論 (Pneumatische Christologie) とて基督教歴史中の異彩をなしぬ、

以上無限神及靈魂の三觀念に就きて、言語との關係を叙したり、其他の附屬觀念に就きて亦此關係あるも、根本の三を示して他は之を零す、

第四章 神人の關係と言語の神格化

宗教に於て、神と人との關係は多くは人と人との關係に基きて想像せらるゝを常とす、特に原始の宗教は神を人格的に觀じ、且極めて具象有形的に其關係を考ふる

が故に神の助に依りて自己の欲望を満たさんとする人間は勉めて神の好意を得
 人事を冀ひ、供犠の如きは此目的の爲めに最も有効なる者と信ぜらる然れども人
 間の交際にあつても接待供犠は必要なるも此に伴ふ辭令なければ人の好意を得る
 能はざると同じく、神に對しても恭敬の實を呈すると共に己が願意を表明するの
 要あり、且又理智的供物の外に神徳を稱讃して之が好意を増長するを要す、即願意
 を表明するには祈禱(Gebet, prayer)あり、之が歡心を買ふ爲には讚歌(Hymn)を歌ふ祈
 禱と讚歌とは古代儀禮の心髓にして、儀式は此に依りて進行するを得、供犠は此に
 依りて其實を結ぶを得、其の重要なりし事は今の吾人の想像には及ばざる者あり
 しならん、

されば、何れの國の宗教にも其原始に、讚歌と祈禱とあらざるなく、猶太の詩篇の如
 き祈禱の最も切なる者にして、印度の吠陀讚誦(Meditation)の讚歌(Sutra)は讚嘆祈願の
 最も豊富なる者なり、其他支那の禮禮の如きは神に告ぐるの祭なり、日本のハヅリ
 (祝)は言語を以て祈禱するなり、ノリト(詔戸)は即祈禱に讚誦を兼ねし者なり、古代は
 云はずとするも、今日の極めて幼稚なる野蠻人も皆此等の方法を有し、多くは讚誦

を呈すると共に祈禱をなせり、南亞弗利加のホツテントット(Hottentots)人は其の大
 祖父として拜せる太陽神ツィゴアノ(Tsi Goba)に對して歌ひ、且祈て曰へり、

- 若よ、ツィゴアよ、
- 君よ、諸の父の父よ、
- 君は我等の父なり、
- 驟雨の雲を注げよ、
- 願くは、我が牧群を幸せよ、
- 我等をも亦幸せよ、
- 我は誠に弱し、
- 渴の爲に、
- 餓の爲に、
- 我は野の果を食ひ得んを願ふ、
- 君は我等の父なり、
- 諸の父の父よ、

君よ、ツイゴアよ、

我等は君を讃嘆せん、

我等は君に報ひん、

諸の父の父よ、

君よ、主よ、

君よ、ツイゴアよ、

此の如きは印度人がドヤウスを祈りし者と異なるなし、

次に西亞弗利加なるオゴエ(Ogwe)人種の間にては、月をイロヒ(Ilohi)と稱して種々

の祭禮所禱をなす、中に其酋長が病む時には部落の婦女子等月光の中に集り踊り、

且歌ひ且祈りて左の歌を稱す、

イロゴよ、我等は君に請ふ、

我等に語れ王を呼びし(呪咀なり)者は誰なるやを、

イロゴよ、我等は君に請ふ、

我等に語れ何れの藥が彼に宜しきやを、

森なる樹木も汝の者なり、

野なる雜草も汝の者なり、

河にある何れの水も汝の者なり、

汝は彼の爲に方を知らん、

かくて地上には一もなければ(醫方が)、

月の光にて彼を醫せよ、

我等の王を死より救へよ、

イロゴよ、月よ、月よ、

此の如き例は一々擧げ來れば限なく、只此等人民が如何に讃禱所禱を有力なる者として之を用ひ、神に對して願意を傳達し、其目的を果し得べしと信ぜるかを見れば足れり、

されば所禱讃禱の言語は神人の媒介として、人の願意を神に傳達する不思議の力ある者となりざるべからず、此より一步を進めて考ふれば、犧牲が神を喜ばしめて之を動かし、又は神に供する酒が神を酔はしむと信ぜらるゝと同一く、所禱讃禱の

言語は、其れ自らにして神を動かす神を左右する力ある者とならざるべからず、現
に人間の間にても、賞讃の詞を呈せられて喜ぶは其詞に人を喜ばする力あるとい
ふ事をも得べければなり、此に於て神を動かす此等の言語は神力ありて、其れ自ら
が神なりと信ぜらるゝに至るなり、

印度の吠陀宗教に於けるブルハスバチ(Bṛhaspati)又ブラハマナスバチ(Brahmanasp
ti)は、即所禱の言語を神とせし者にして、其名は即所禱の主の義なり、此神は、所禱の
最古の王なりといひ、所禱の生出者と稱しられ、自ら歌を作り讃誦を歌ひ、其他一切
の所禱呪咀の方法を知れりといふ、此神が歌を歌へば諸神喜で集り來り、又此神が
讃誦を僧侶に傳へしより人間始めて所禱を知るに至りしといへり、此神が讃誦の
不思議力を讃仰して之を神化せし結果なるや明なり、故に此神の言語の矢は當ら
ざるなしとふひ、又言語に依りて曙光(鳥舍師 Usha)太陽(蘇利耶 Surya)火(阿姑尼 Agni)
を發見し、其歌を誦すれば暗星は退散すといふ、梨俱吠陀四卷一の二三、一四、一六一
七、三卷三九の五、一七の二、四卷三の一、一、十卷六八の九、二卷二四か三等參
照、彼の神聖なる言語は万能力ありと信ぜられしなり、

(三三)

此と同じく所禱を神とせし者にナマハ(Nama)支那譯南無又は那莫、那護、南護、羅莫、
諾護等あり、ナマハとは即所禱の神にして、後世所禱の始に用ふる語となり、
は此が爲なり、此神は天地を支撐し諸神を動かすといふ、梨俱吠陀六卷五一の八、
吠陀の末葉には又單に言語の神を生じたり、ゾーチ(Vāc)伐底(即言説是れなり、此神
は元は河の女神として、福德の神なりしサラスワチー(Sarasvatī)薩羅酸底が、福德所
禱の助成者となり、所禱の司管者となり、終に言説なる言語の神となりし者にして、
其性質はブリハスバチ及ナマハに同じ、而して印度人は此神に非常なる力ありと
信じ、天地を包括し万物皆其意の如くならざるなしと信じたり、拙著印度宗教史四
一頁參照、彼等が言語の不思議力に驚きしを見るべし、此神は即我國に於ける辨才
天なり、

金光明經大辨才天女品に此女神の徳を讚するを見るに、其が言語の神化なるを知
ると共に、又頗る吠陀を追慕するに定る者あり、其文に曰く、

若欲精辯才天女、哀愍加護、於現世中得無礙辯、聰明天智、巧妙言辭云々
出廣長舌、能覆於面、覆諸部洲及四天下、能覆一千二千三十三世界、普覆十方世界、圓滿

(三三)

周備不可思議能除一切煩惱炎熱

此く所騰し讃誦して次に二十の諸佛諸天の妙辯才を敬禮せり辯才天の性質と其崇拜の初機が全く言語を神化するより出でし事愈見るべし

此に次ぎて印度にて一言辭を神化したる者あり、オーム(ॐ)隨是れなり、アーン、ク、ヤ、優波尼沙士(一)の二に、此を神として曰く、

隨、此音は全世界なり、

過去、現在、將來、武等は總て隨なる音なり、又空間の外に及超えて存する者も皆隨なる音なり、

此の如く言語の不思議力に驚きて、之を神靈とするは印度人に止まらず、セム民族の中にも古くより此信仰ありし者の如し、即希伯來最古の宗教に存し、創世紀(一)の三には、神光あれとのたまひければ光成りきとて其言に神力あるかの如くに信じたり、此信仰は亞刺比亞にも存し、神の力は其言即命令の言辭に依りて發表すとなし、之をアムル(Amur)と稱し、神は自ら世界の土を翹然として此アムルを以て世界を支配せしむとせり、此信仰は基督教にも及び、又た希臘及中世の哲學にも入りたり

第五章 宗教哲學に於ける言語の神格化

吾人は前章にては宗教的意識が如何に言語を神化するかを見たり、此よりは此宗教的意識に就きて哲學的考察をなしたる人が、如何に言語を神靈化するかを見ん、先づ歐洲に於ける此種の宗教哲學より始めん、

猶太教思想の中にて、セムの原始思想の言語に關する思想を承けて言語を神化したるは、蓋し、歴山府に起りし猶太哲學の翹楚、フキロ(Philo)を首とすべし、フキロの哲學は、神は絶對獨立なりとして其の精力の流出に依りて世界の成立を説く者なり、而して其流出階級の中にて、最も神に直接して世界の最原型最深根底なるは、神の心中に生ぜし觀念が實の力(Dynamis)として働くにあり、而して此原型の實力となれるは即言語ことばにして、彼は希臘哲學の思想に依りて、之をロコス(Logos)といへり、神の力は直接に世界に干涉せず、其言語ことばは其工手となり、多くのロコスあると同じく多くの物を生ず、犬は犬なるロコスの發表なり、變化といふも其ロコス發表なり、ロコスは總ての者の萌芽なり、故に又之を萌芽のことば(Logos originarios)

といふべし、此ロゴス人においては一切智慧信仰の萌芽にして、神人の間の媒介なり、人が神を信じ其教を得るは直に神に接するにあらずして、此媒介に依る、此思想は實にプラトーンの觀念實在論を宗教に適用し、之に依りてセム民族の言語信仰を開發したる者なり、

フロアの此思想は直に基督教に反響し、其の少く後即一世紀の末に成りし約翰福音書は、ロゴスの信仰を基督として、教主基督の一生の事業及其教主たるの資格を解釋したる者なり、約翰傳は基督教の事績を叙する上にては路加傳に據りし者なるも、其思想は希臘猶太の合一に成りしロゴスの信仰にありき、特にフロアの哲學にありては、哲學を主としたるを以て神と世界精神と物質との差別を説き、其中間の活動者としてロゴスを説きしも、此にありては主として宗教の爲にロゴスの思想を採用し、其が神人の媒介者たる方面に重きを置き、而して基督とロゴスとを連結したり、故に其首に曰く(一章)。

太初にことば(即ロゴス)ありき、ことばは神と共にあり、ことばは即神なり、此ことばは太初に神と共にありき、

萬物此に由りて(2)造らる、造られたる者は一として之に由らで造られしはなし、

それことば肉體となりて我等の間に寄れり、我等其榮光を見る、實に父の生みたまへる獨子の榮光にして、恩寵と眞理とにて充てり、

恩寵と眞理とはイエスキリストに由りて來れり、
未だ神を見し人あらず、唯生み給へる御子、即父の懷に在る者のみ之を彰せり、
約翰書は此の如く、ロゴスが神の御子キリストとして現はれしを我等の教主と仰ぐべきを説きしなり、

二世紀のマルチールヌスチン(Martin)亦、基督は肉となりしロゴスにして、吾人亦ロゴスの萌芽を有するを以て、彼の贖罪に依りて救はるゝと信むたり、此より以後基督教の思想界には、基督をロゴスとし、神人の媒介贖罪の原動力なりと解釋せし宗教哲學は甚多かりき、

印度にありては優波尼沙土の哲學と共に**冥曼薩**(*Maya*)**即思惟派**は、聲音の常住たるを唱へ、言語は口頭の出沒と共に消滅するにあらず、其れ自らにして常住不滅

の本跡なりとしたり、此派が聲音言説(Va)の常住を唱へしは、此に依りて吠隨の言聲を即聖教(Sabda)を神聖にし、吠隨を以て宗教上最上の典據となしたるに出づ(拙著印度宗教史考二部三章二節参照)此後印度の宗教哲學諸派は皆吠隨を無上の聖典となし、其言聲を尊びしも、其に就きて特別に學說を組織せし者なくして、佛教の後紀元前四世紀の波爾尼(Pāṇini)に及びぬ。

波爾尼の宗教哲學は、一言にして蔽へば認識論よりして觀念實在論(殆どプラトンのに同じき)を立て、而して此實在的觀念を以て言語音聲の本跡となし、其最高本跡を梵天として之を信仰考察するにあり、波爾尼は思へらく、吠隨は無上の聖典にして解脱の道なり、故に解脱に進まんとする者は吠隨を研究し、其言語を明にせざるべからず、而して言語を研究し來れば、言語は只思想の器具として時々生じては又滅する者にあらず、其には不滅の本跡あり、之を發表せらるる者即スポタ(Sphota 塞普多)と稱すべし、此スポタは恰もプラトンの觀念(Ideas) フキロのロゴスに同じく、各屬種等吾人の觀念概念に相當して之が名稱言語の本跡を存せり、而して概念が犬猪より四脚獸に、四脚獸より動物に、動物より生物に上ると同じく、スポタに

も個々特別より漸次抽象精微に進み、其極は純粹の「存在」に至る、此純粹至高の存在は即万有の源泉根底にして即梵天なり、其他の万物は皆此梵天の存在の變象に外ならず、吾人は各其本跡スポタを有して個人的存在を存すも、其の存在としては梵天を質跡とする者に外ならず、此故に最上梵天に入りて個人的生存を解脱するは、言語の研究に依りて其最高本跡を認識し一切の差別相を脱して此最上に歸入するにあり、マイトラーヤニ優汲尼沙土(六の二二)の言以て證となすべし曰く、
能く言語なる梵天を曉悟する者は最上梵に歸入す、

と、要之波爾尼の宗教哲學は フキロと同じく、言語を神として同じく言語の性能を分有せる吾人の、解脱して神に合一し得るを教へしなり(印度宗教史考第九部二章参照)。

第六章 文字の崇拜

波爾尼は一方にて此の如き言語的宗教哲學を組織しぬ、然れども彼は一々の言語を神とし、一々の文字を尊崇するに至らざりき、然れども其餘波は印度宗教に及び、佛教を感化して終に極端なる文字崇拜の宗教を生ずるに至りぬ、其發達變遷の

路程は明ならざるも、此崇拜を明に發表し組織したるは、龍樹の頃若くは龍樹自身ならん。

(四二)

即龍樹は、般若波羅蜜多を得るの方として、陀羅尼に通達するの要を説き、陀羅尼(Dharani)即一切奧祕の旨と力とを能持蘊蓄せる言語に依りて、諸法に通達して無礙自由なるべく、又此に依りて天耳天眼の神通(Radhi)を得て人の宿命を知るべしといへり、而して此能持の言語は皆言語音聲より成るを以て、其音聲を神とし、從て其音聲の文字を崇拜し、文字に各神力ありとせり、故に大智度論に曰て(二十八卷)、

有陀羅尼、以是四十二字攝一切言語名字、何者是四十二字、阿(A)羅(Lu)波(Pa)遮(Oa)那(De)等……不生行陀羅尼、菩薩聞此阿字、即時入一切法初不生、如是字々隨所聞皆入一切諸法實相中、是名字入門陀羅尼、

此を以て、眞言尊重の佛敎にありては、此等字母の神力を稱する事詳なり、今瑜伽金剛頂經釋字母品と文殊問經字母品とに依りて、其が字母の功徳を列擧せん。

- 字母
- 金剛頂經
- 文殊問經
- 一切法本不生
- 無常聲

am.	au	o	ai	e	i	l	ṣ	r	ū	u	i	i	ā
一切法邊際不可得	一切法化生不可得	一切法瀑流不可得	一切法自在不可得	一切法求不可得	一切法沈沒不可得	一切法染不可得	一切法類例不可得	一切法神通不可得	一切法損減不可得	一切法醫喻不可得	一切法災禍不可得	一切法根不可得	一切法寂靜
無我所聲	化生聲	取聲	威儀勝聲	起所求聲	三有染相聲	生法相聲	斷染遊戯聲	直輒相續有情聲	損減世間多有情	多種逼迫聲	世間災害聲	諸根廣博聲	遠離我聲

(四三)

學教宗的學語言

d lh t ñ jh j ch o ñ gh g kh k ah

- 一切法遠離不可得 沈沒聲
- 一切法離作業無所得 入業異熟聲
- 一切法等虛空不可得 一切法等虛空聲
- 一切法行不可得 甚深義聲
- 一切法一合不可得 權稠密無明闇冥聲
- 一切法支分不可得 五種清淨聲
- 一切法離一切遷變 四聖諦聲
- 一切法影像不可得 不覆欲聲
- 一切法生不可得 超老死聲
- 一切法取敵不可得 制伏惡語言聲
- 一切法智不可得 制伏佗魔聲
- 一切法慢不可得 斷語聲
- 一切法長養不可得 置答聲
- 一切法怨敵不可得 攝伏魔諍聲

學教宗的學語言

r y m bh b ph p n dh d th t n dh

- 一切法執持不可得 滅穢境界聲
- 一切法諍不可得 除諸煩惱聲
- 一切法如令不可得 真如無間斷聲
- 一切法住處不可得 勢力進無畏聲
- 一切法施不可得 調伏律儀寂靜安隱聲
- 一切法界不可得 七聖財聲
- 一切法名不可得 徧知名色聲
- 一切法第一義諦不可得 勝義聲
- 一切法不堅如聚沫 得果作證聲
- 一切法縛不可得 解脫繫縛聲
- 一切法有不可得 生三有聲
- 一切法吾我不可得 息慢憍聲
- 一切法乘不可得 佛通達聲
- 一切法離諸塵染 樂不樂勝義聲

kr h s sh ç v l

- 一切法相不可得
- 一切法語言道斷
- 一切法本性寂
- 一切法性鈍
- 一切法一切諦不可得
- 一切法因不可得
- 一切法盡不可得
- 斷愛反聲
- 最上乘聲
- 信進念定慧聲
- 制伏六處得六神通智聲
- 現證一切智聲
- 害煩惱離欲聲
- 一切文字究竟無言說聲

(尙此等字母の原字及漢譯字發音に就きては、拙著印度宗教史卷尾の附録梵語字母表を参照せよ)

此種の教は此外大日經卷二にもあり、眞言の教に依れば、此等諸字母は皆不生不滅にして常住なる聲の本體を表し、此字を寫し或は此音を發すれば、其字の功德自ら現るべしとなせり、されば彼佛教にては又此等の文字を神祕の者として、諸佛菩薩の代表となし所謂種字(種子)の崇拜となりぬ、此等が或は掛幅に或は雪山の岩面に刻せられ、人の崇拜する所なるは日本至る所に見るを得べし。

文字の崇拜は此外に類例甚だ多からず、只埃及には第二章に述べしが如き記號體文字の尊重あり、支那人が文字を貴重し字紙を忽にせざるが如きは、幾分か之に近からん、されど其は固より印度及佛教に於けるが如く精細修飾ある文字の崇拜にはあらずるなり。

第七章 民間崇拜に於ける言語崇拜

正統の組織宗教例せば佛教及基督教の如き宗教が國民を支配して其信仰其道德の下に人民を支配するに當りては、其勢力甚偉大にして總ての信仰宗教は其下に壓倒せられしを観あり、然れども此の如き信仰統一教會治行の時に當りても、民間の信仰 (popular faith) は決して其勢力を失へるにあらず、社會の下層に浸潤して正統宗教の力も之を左右する能はざる者あり、然かのみならず正統の組織宗教成立教會 (positive religion, established church) も却て之が爲に動かされて、其信仰儀式の中に知らず識らずの間に民間信仰の影響を受る事あり、畢竟社會の大多數は無知の民多く、少數哲學者の勢力たる成立教會も之か信仰と同化するの要あり、且其大多數が奉ずる所の世俗的民間信仰なる者は、元は原始時代の宗教心を保存せる者に

して、文化に依りて多少の變化を經たるも、尙其古の根源的特徴を有し、此根源の勢力は中々に衰へて、抜け難きが故に、文化の産物なる成立教會も全く之を壓倒し去る能はざるなり、所謂「三つ見の癖」まで、蓋は百まで離れ忘れずにして、民間信仰を研究するの避くべからざるは、猶太人の性行を見るには、其の三つ見たるの古と、其殘存とに着眼するの必要あるに同じ、

されば上來述べ來りし言語及文字崇拜も、正統の宗教の中に入り、或は高遠なる議論を結托せるも、其源を搜ぐれば第二章及第三章に述べしが如く、宗教の始に當りて既に言語の不思議なる力が與て大に力ありしが故にして、又今日の民間信仰にも其餘波の滔々として行はるゝを見るべし、即龍樹が字母崇拜を論證して(大智度度二十八卷)言語をいへる中に、

音聲語言會會生滅音聲已滅而衆生憶念取相念是已滅之聲作是念言是人罵我而生瞋恚稱讚亦如是、

といへるは言語に關する民間信仰を破せんとしたる者なるも、此信仰は非常の勢力ある者にして、且つ又龍樹自家の字母説も其源を探ぐれば、此民間信仰が珥曼薩

の聲常住論及波備尼のスコタ論に反映したる者を繼承せしなり、彼は神聖に於て實に基礎の大地を低しと罵て、自ら高塔の上に座するの尊高を誇りしハメスの徒たるを免れず、

余は今民間信仰の研究の忽にすべからざるを明にせん爲、此く數言を費しぬ此より言語に關する民間信仰を觀察せん、

民間信仰が言語に何か不思議の神力ありとせるは、咒咀の信仰に於て最も明に見るべし、古日本にて「宇氣比」といひ、ノロといひ、蒙古種族の間にシヤイチ(Shamane)といひ、印度にてシヤパタ(Japata)といひ、西洋にてオーメ(Curse)、マンブ(Fluety)、マレデスシヨム(Malediction)等を稱し、南スラツマの間にナロク(Narok)といひ、マヤルの間にアートルク(Atole)を稱する者是れなり、支那にて祝禱といふも元は此なりき、

咒咀に關する信仰とは、約言すれば人の言語には不思議の力ありて、言語は事實を生む者なりと信じ、特に人の運命禍福には言語にて此くあれといふ事が其運命を左右すと信ずるなり、支那にて「言爲」といふ常套語あるは、只言と事と偶然に暗合し

たりといふにはあらで、根本に此信仰に出でたるなり、古事記より此信仰の一例を
 擧ぐれば、日子番能邇々藝能命此國に來り、笠沙の岬に上り大山津見神の二女岩長
 姫と木花之佐久夜姫とを聚りしも、姉岩長姫の醜なるを以て之を追ひぬ、其時大山
 津見は之を耻として曰く、

(五〇)

我が女二つ並べて奉れるゆゑは、石長姫をはつかはして、天神の御子の命は雪降
 り風吹けども石の如くときはにましませ、又木花之佐久夜姫をば、木の花の榮ゆ
 るがごとませとうけひて買りき、今石長姫を返して獨り木花之佐久夜姫をば留
 め玉ひつれ、天神の御子の御妻は木の花のあまひみしなむ、

といへば、此中には先には堅實且華麗なれとの祝福をなせしなり、而して天神が其
 祝福の意に背くや、祝福は反對に咒咀となりて、華麗而も薄弱の實を現はし來りぬ、
 即古事記の記者は

かれ是を以て、今に至るまで天皇命の御命長くはまさいるなり

といへり、其が如何に祝福咒咀の功力を信じ其言語に不思議力あるを思ひしかを
 見るべし、此例國史に甚多し、咒咀の言語信用は我邦のみならず、諸國民俗に此を用

ひざるなく、野蠻人の間にも開明國の民間にも此信仰と慣行なきはなし、從て其種
 類方法も甚多種なりと雖も、今は言語に關する者のみに就きて、二三の實例を附加
 せん

印度にありては、言語咒咀の信仰早く既に吠隨時代に發し、其阿他婆集錄は全躰殆
 ど此咒咀を集めたる者なり、其最も簡單なる者より擧ぐれば、物の名稱に關して聯
 想より出でし者多し、アパーマルカ (Apmarga) の木が一切の惡事を消すといふ
 は、アパーマルカといふ語が消滅といふ語に似たるが爲なり、病の靈たる大神を
 追ふに穀子を以て賭博をなすは、博徒なるシラクニン (Sraghina) が恰も犬殺しとい
 ふに同じきが如し、此の如き言語功力の信用あるが故に、又直に之を人間の將來の
 幸運を左右するに用ひんとするは人情の常にして、印度にては簡單に人民の行ふ
 者としては、問答を用ひたり、例せば夫婦が男子を得ん事を願へば、夫は懐妊の婦に
 向て、何を飲だ何を飲だ、と問ひ、婦は答へて、男の子の出來を男の子の出來と答へ、
 以て胎中の子を男子ならしめ得べしと信じたり、又結婚後新夫婦將來の福を咒咀
 して、婆羅門に向て、何を見て居ると問へば、婆羅門は對へて、男の子と家畜とをとい

(四九)

ふなり、

CHID

されば此の如き言語祝福呪咀に就きて方式を定め、之を一定の場合に用ひんとするは又自然の結果にして、所謂まじないとなるなり、印度にては之を祝福即親愛と呪咀即疾悪とに分ち、*piya-kalpa* 及 *dveshya-kalpa* と稱したり、今其數例を譯せん、

風が諸方より蓮池を吹く如く、汝が戀の果は降るべし、

其は十月にして出で来るべし、

といふは戀の成就のまじないなり、

集會 (*Sabha*) よ、我等は汝の名を知る、汝が名は會談 (*anishita*) なり、

集會にある何れの人も我と睡れかし、

我は此處に居る人々の榮譽と知曉とを知る、

汝等の考へが何れかに轉じ、或は此處彼處に注げば、

我等は其を返へさしめん、彼等は我を悦べかし、

即是れ命話を盛にし人を親密ならしめん呪文なり、

此處に今堅き家を建つ、其は幸の中にあれ淨酪も流れかし、

家よ、此の如き者として、總ての勇者と共に善き勇者と共に敗るゝ事なき勇者と共にあらしめよ、

家よ、堅き者として、此處に場を占めよ、乘馬にも牛にも用にも富みて、

繁昌にも淨酪にも牛乳にも富みて、汝は大なる幸に上れ、

家よ、汝は蔽ふに宜き高き屋根なる擔ひなり、

憤も若者も牝牛も日暮となれば延びたる走りもて汝に行けよかし、

此家の建つは、ササキタルも婆由も因陀羅もアリハスバチも知らし召さん、

濕へるマルツは淨酪を降らし、王なるバガは我等の爲に皇のうねを擡げん、

人々の主婦よ、神的なる汝は初より神々に立てられて、幸ある隱場とならん、

汝を草もて包まん、親しくあれよ、我等に勇者と共に富を與へよ、

此は家を建つるに當りての祈禱兼呪文なり、此時代には人生の大事には皆此の如き祝福をなしたると共に、又日常の細事に至る迄皆呪文を以て祝福呪咀をなせしなり、其中には病を止むるの呪、骨を折りしを醫する呪、障止めの呪より敵を呪ふの呪に至る迄、日常の事一も呪文に依りて左右せらるゝと信ぜられざる者なし、其略

(五五)

(Kass)の呪には曰く、

(五四)

靈が靈の願に依りて速に其處より去るが如くに、
 汝カーサーも靈の吹くに從て飛び去れ、
 よく尖りたる矢が速に其處より去るが如くに、
 カーサーよ、面の擴がりに飛び去れ、
 太陽の光線が速に飛び去る如くに、
 カーサーよ、大洋の流に從て飛び去れ、
 毛髪を生ぜしめん呪には曰く、
 神々は、蜜を交へたる此小麥をサラスプチの畔にて咒石の上に掘り込みぬ、
 因施羅百力(Chalra)は鐵の主にして、巧なるマルツは鐵を使ひぬ、
 其が爲に人間を可笑しくする其の落ちて散りたる毛髪を喜ぶ汝の喜は、
 汝より去れ、シヤミー(Shami)樹名よ、汝より他の木に之を散らん、汝は百の枝を垂
 れて繁れ、
 高き葉あり、幸多く、雨にて生長して、直き

シヤミーよ、母の子に於けるが如く、我が毛髪に幸せよ、
 血止めの呪に曰く、

彼處を行く黄色なる赤き(血)色の衣看けたる彼の女達よ、
 兄弟なき姉妹の如くに、其榮えを奪はれて靜に止るべし、
 百の血管千の黄色なる中に、
 此の中央は靜に止まり、又同じく端々し靜なるべし、
 高き砂の砂丘は汝を周りぬ、
 内に止まりて巢に入れ、
 世と同じ風の咒文は諸國にあり、フアン人のクラグラ中にも存し、我國にも多し、其の奧
 州に行はるる者は、血の道は父と母との道なれば、血の道止めよ、血の道の神といへり、
 終に此等咒文の言語に就きて二三の注意をなさんに、第一に咒文の常として命令
 法、願望法の用ひ甚多きは以上の例にても明なり、盡し言語に力ありとの信仰ある
 中にも、最も力ありげに思はるゝは動詞の命令及願望にして、毛髪長せよといへば
 毛髪は其命に従ふが如くに思はれ、此家はとこしえに立てよかしといへば此願は現

(五五)

實となると思はるゝが故なり、第二には譬喩多し、即先の例に示せる如く、戀の成就を稱して樹の蜜か生長すといひ、一家の幸福を稱しては淨酪といひ、毛髮の生長をば樹葉の繁るに比したるが如き是れなり、蓋し知力判断に乏しき人民にありては、譬喩が其思想信仰を支配するの大なるは今日にも多く見る所の事實にして、古の人ば木が繁るといへば毛髮の生長と同じき力なる如く思ひ、一を以て他に力を及ぼさんとしたるなり、第三に同聲音の反復多し、此は以上の例にては十分に明ならざるを以て、二三の例を擧げんに、病を退くる咒文に

Avatas te Avatah Paravatas te Avatah

(近邊より近邊より汝に、遠方より近邊より汝に)

といへるが如く、始は稍自然に同聲音を反復せしも、後には人工的に勉めて同聲音を反復し、以て咒文の咒力を増すべしと信じたり、後世の詩に

Na nanununo nunono nânâ nânânâ nanu,

Nunno nunonununo nunununanû.

若くは

Dâdadoduddaduddâdâ dâdâdoduddadidâdoh,

Duddâdam dâdâde dâdde dâdâdadâdadodâdoh.

といへるが如きは其の最も甚しき者なり、佛教の眞言中同音の反復多きは此等の餘波なりとす、出産一切如來法眼徧照大力明王經に、

唵(Om)母寧(Mune)摩賀(Mahâ)母寧摩賀母寧……………

呬(hâm)呬呬呬(he)薩薩薩濕薩哩(hegyare)摩賀濕薩哩を以て咒文を始め、以下

同聲を反復して

嚩吒嚩吒……………惹播惹播惹播惹播(Tara?)沒度沒度沒度沒度(Budd?)

滿駄滿駄滿駄滿駄(Manda?)

等以下嚩日囉(Vajra)贊擊(Canna)等を無數に反復して全く意義の聯絡なきが如きは、反復言語の力を信ずる事の病的に走りたる者といふべく、眞言の中には此の如き者決して少なからざるなり、

今少しく印度及眞言の實例を以て咒咀の信仰が言語の功力を信ずるに出てしを説き、此信仰は高等なる宗教を有する國にても民間に勢力を有せざるなく、諸國

(五八)

の戯曲中に宿命悲曲として怨を懷きて死せし人の臨終の一言が怨家に果をなす等の仕組は甚多く、我國の民間にも此種の信仰今に多し、獨逸のウーランドの詩へ俗人の咒咀(Sänger's Fluch)といふは一俗人が國王に其子を殺されし怨の爲に、一言の咒咀をなせし爲、城郭破れ國亡びしを歌へり、

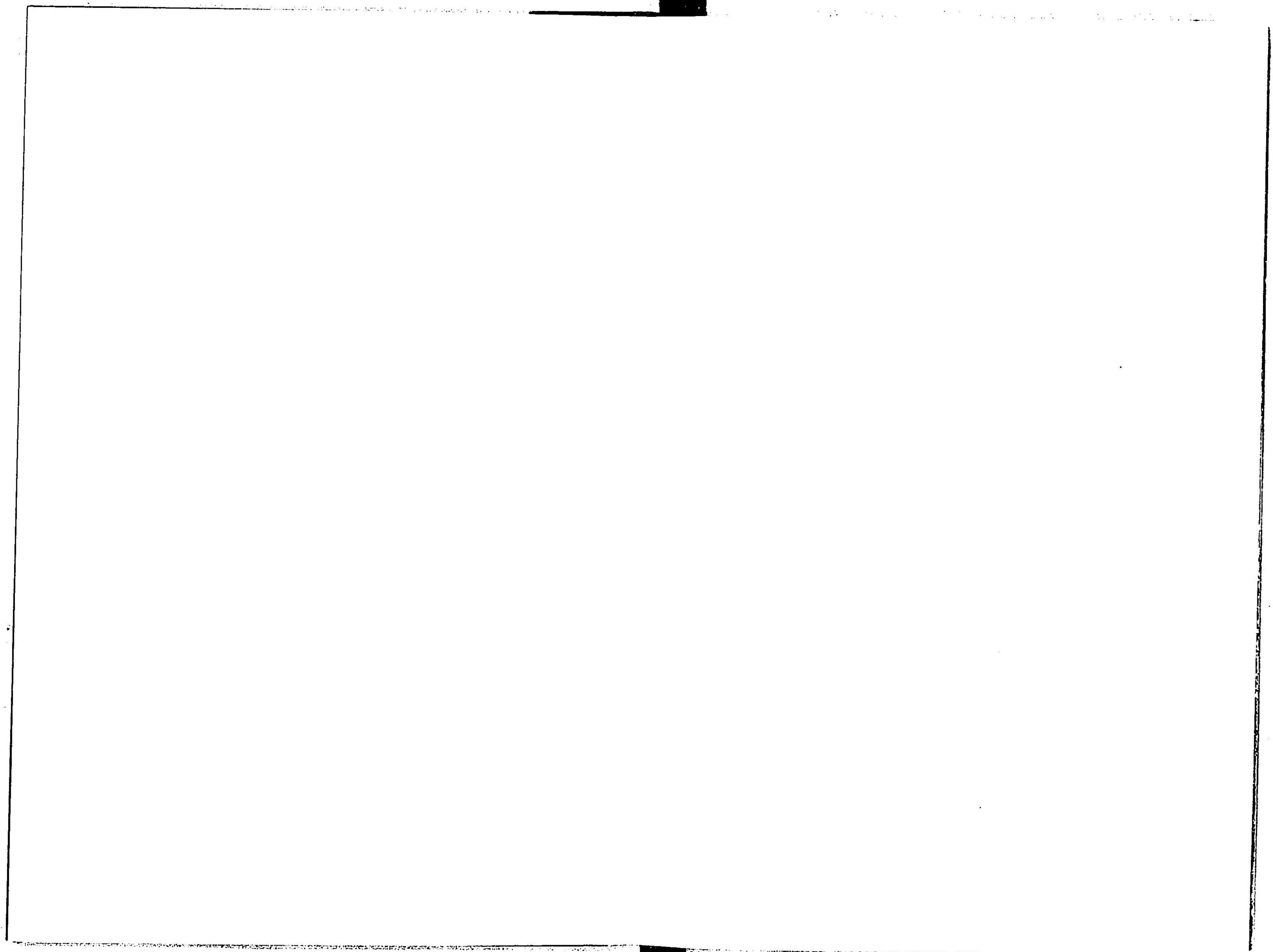
此の如き言辭の不思議力信仰は、又變形して盟約誓言となりて言を以て人の意志を約束すべしとなすあり、又は魔術に應用すれば咒文を以て惡魔を呼び興すべしとなすあり、此等に就きては特に叙述するの要なかるべく讀者の講究に委す、

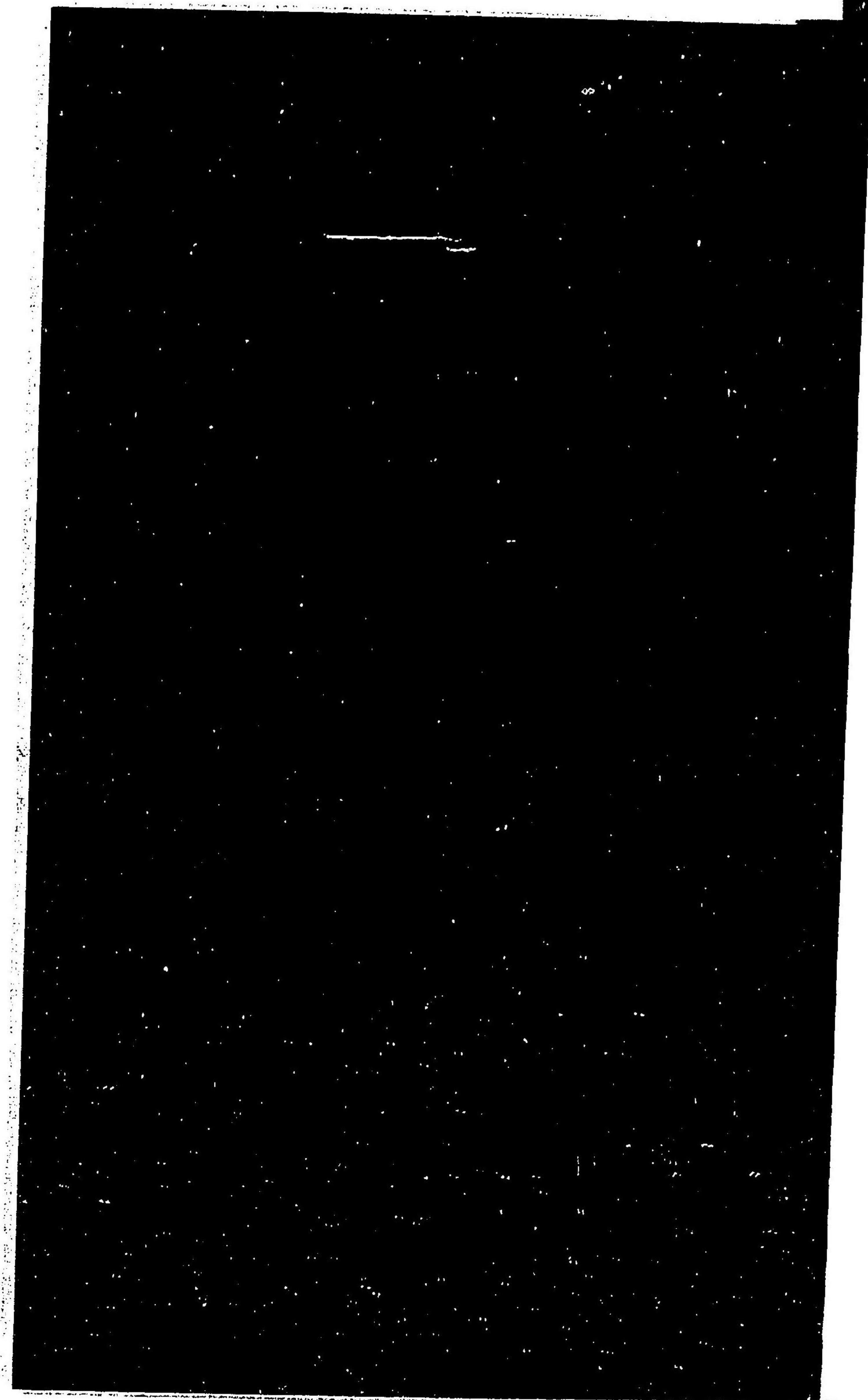
言語學的宗教學終

哲宗

HT 20







14

225

Ⓜ

哲学館講義録

言語学的宗教学

国立国会図書館

013578-000-5

14-225

言語学的宗教学

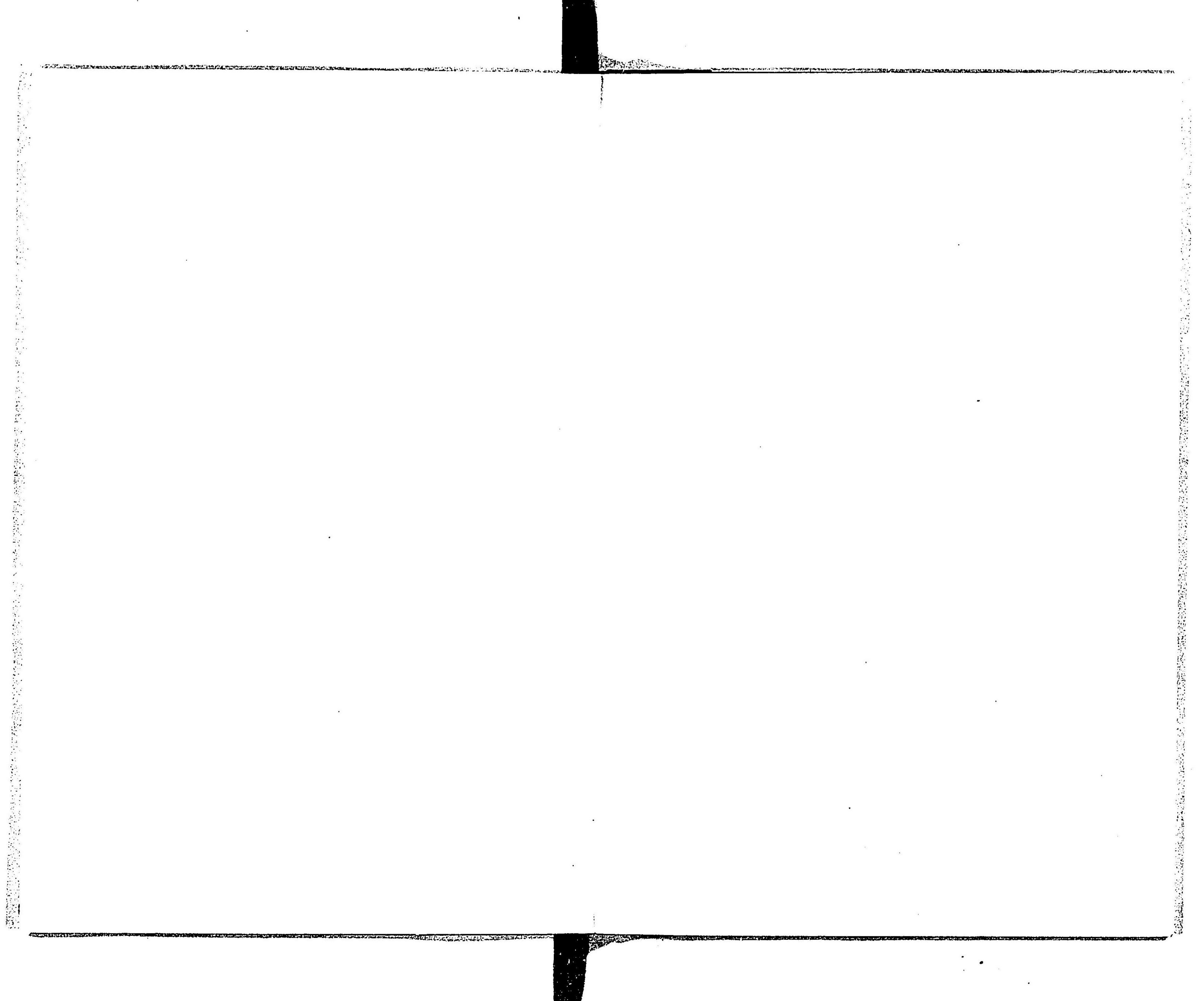
姉崎 正治/著

M32?

ABA-0046



7-



抗戰時期第十年度
國語教學法講義錄

國語教學法

楊奇正

卅七 20

14

225